

(様式 5)

指導教員 承認印	
-------------	--

平成 25 年 1 1 月 3 0 日

学位（博士）論文の和文要旨

論文提出者	工学府博士後期課程 応用化学 専攻 平成 22 年度入学 学籍番号 10832301 氏名 新井 信昭 印
主指導教員 氏 名	亀山 秀雄
論 文 題 目	知財マネジメント支援による研究開発実用化手法の研究
<p>論文要旨（2000 字程度）</p> <p>本研究では、研究開発実用化の手法に関し知的財産マネジメント支援の視点から考察した。（１）研究開発ロジックモデルに、事業戦略ロジックモデルと知財戦略ロジックモデルを重ねて一枚にした「三位一体ロジックモデル」を提唱した点、（２）技術流出防止策を時系列的に一枚のロジックモデルに表示した秘密管理ロジックモデルを提唱した点、（３）研究開発コンソーシアムの成果特許を、活用容易かつ排他権行使可能な形でプールする成果活用の仕組みを提唱した点、そして、（４）創出特許の登録率が研究開発成果の実用化に対し有意であることを統計学的に実証した点、にオリジナリティがある。</p> <p>本論文の工学的価値は、P 2 M (Project & Program Management) 理論と特許データを活用した知財マネジメント支援により、研究開発成果の実用化を促進し、実用化を通じた化学工学のさらなる発展ひいては真の科学技術イノベーション実現に貢献することにある。</p> <p>第 1 章「緒論」では、従来の知財マネジメントの課題を明らかにし、その解決を図るための知財マネジメント手法を提案しようとした研究の動機について述べた。その課題とは、日本の研究開発効率が低下していること、日本製品の国際シェアが市場拡大に伴い急激に低下していること、日本国特許出願数が 20%ほど低下しイノベーション専有化に寄与していないこと、バイドール特許の役 60%が不活用であること、毎年年度末になると特許出願数が急増することから予算消化出願が疑われること、などがある。</p> <p>第 2 章では、研究開発戦略と事業戦略・知財戦略の三位一体を実現するための「三位一体ロジックモデル」を提唱した。ロジックモデルは研究開発支援のために有効であること</p>	

(様式 5)

が実証されているので、これを事業戦略・知財戦略にも拡大したものである。結果として、3つの戦略部門間のコミュニケーションを促進してイノベーションの専有化が可能となることが示唆された。

第3章『『見える化』による発明、技術、ノウハウのリスクマネジメント』では、秘密漏洩という「あるべきでない姿」を見える化することにより、漏洩を未然防止するための「秘密管理ロジックモデル」を提唱した。特許公開や意図しない漏洩、さらに、人的流出にともなう漏洩などにより、発明や技術・ノウハウが流出したことにより途上国のキャッチアップが懸念されるが、これを有効防止するためのツールである。結果として、発明・技術・ノウハウ等の漏洩防止に有効であることが示唆された。

第4章「P2M知財マネジメント適用によるコンソーシアム成果の有効活用」では、コンソーシアム成果の特許をいわゆるパテントプールの代替となる「管理エリア」で管理することを提案した。パテントプールではプールされた特許を有する企業が個別に侵害対応等を行う必要があるが、管理エリアに専用実施権を設定することにより、係る場合に一括対応が可能となる。結果として、後者では管理エリアを管理する権利者が単独で対応できるようになり、これにより、研究開発成果の有効活用と排他権行使の容易さが促進される。

第5章「研究開発の成果を実用化に繋げるための評価指標に関する考察」では、実用化を目指す研究開発の成果の評価指標をケーススタディにより考察した。統計的解析による考察の結果、研究開発の成果の実用化率と、特許登録率との間に相関があることを見出した。結果として、研究開発の活動を評価する際の評価指標として、特許登録率を採用することの妥当性が示唆される。

第6章「結論」では、本研究で提唱したツール等を通して認められた成果と残課題を総括し、今後の発展性について議論する。本研究の成果は、これからの化学工学における、特に研究開発を実用化するための具体的・実用的な仕組みを提示するものである。結果として、これからの化学産業における研究開発の実用化を加速させ、真に科学イノベーションの創出に貢献するであろう。